

# シツツケルの意味分析

黄 文 溥\*

キーワード: しつづける, 持続性, 動態, 非限界

## 要 旨

本稿は、まず事実確認から出発し、従来見過ごされてきた「永続的变化の結果状態の続き」や「変化過程の続き」「属性の続き」などといったシツツケルの用法も視野に入れ、アスペクト的性格からシツツケルの意味分析を行うものである。シツツケルの前項の中心的なメンバーは持続性・動態・非限界といった素性を持つが、周辺のメンバーは持続性・動態・限界、あるいは持続性(永続性, 長期性)・静態・非限界のいずれかを持つ。シツツケルの用法は持続性, 動態, 非限界といった素性と関連して、言いやすいものから言いにくいものへと度合いを持つ現象である。こうした現象の一面は、前項のアスペクト的性格と後項の意味との複雑なからみあいから説明できる。

## 1. はじめに

アスペクチュアリティの語彙的表現手段の一つであるシツツケルの用法が、前項動詞のアスペクト的な性格と大きく関連することは一般的に認められている。例えば、「～つづける」が「継続動詞につくのがふつうで、状態動詞や瞬間動詞にはつかない」(寺村 1984: 177)といわれるように、動詞のアスペクトの種類との関連や、シツツケルの前項動詞が持続性を持つ動詞に限られ、点性を表す動詞ではシツツケルが言えず(反復相的な場合を除いて)、持続性を持つ動詞でも、

- (1) a. 走りつづける(過程の続き)
- b. 立ちつづける(維持の続き)
- c. \* (時計が)とまりつづける(結果の続き)

のように、過程または維持といったアスペクト的な性格を持つ動詞の場合にはシツツケルが言えるが、そうでない動詞の場合には言えないというように、動詞レベルというよりも動詞句レベル

---

\* HUANG Wenpu: 中国華僑大学外国語学院講師。

でのアスペクト的な性格との関連(森山 1986)が指摘されている。

点的な事象は、シツツケルの後項の続き性(続き性については 3. を参照)の意味と合わないの  
で、シツツケルの範囲内から排除できるが、実例を調べた結果、次のような疑問点が残った。

シツツケルが前項のアスペクト的な性格との関連において言えるか言えないかという一般化  
は少し強すぎるのではないか。むしろ言いやすいか言いにくいかという弱い一般化なのでは  
ないか。

従来、使えないとされているにも関わらず、実例が少なからず出ている。確かにそれらの実例  
はシツツケルの周辺の用法を構成している(詳しくは 2. で述べる)。しかし、従来のように、シ  
ツツケルの中心的な用法だけで一般化するようでは、シツツケルの使用の性格の全容を捉えるこ  
とはできない。周辺の用法も重要な意味を持つため、それに注目すべきである。

また、シツツケルの後項の表すアスペクト的な意味は「継続」と考えられ、「している」との区  
別の中で捉えられ、議論されている(金田一 1955, 寺村 1984)が、いわゆる「継続」はシツツケ  
ルの前項のアスペクト的な性格の振る舞いと関連があるのだろうか、また、あるとすればどのよ  
うに関連するのか、といった問題が必ずしもはっきりしているとは言えない。

本稿では、上の二つの問題を考察の視野に入れつつ、実例を調べた結果から、以下の点を明ら  
かにしたい。

- (i) シツツケルの使用は従来指摘されている持続性の他に、動態・静態、限界・非限界といっ  
たアスペクト的な性格との関連も大きい。
- (ii) シツツケルの用法は言えるか言えないかといった現象ではなく、中心的なものから周辺  
的なものへ、言いやすいものから言いにくいものへ、というように程度をなす現象であ  
る。こうした現象の一面は、前項のアスペクト的な性格と後項の意味との複雑なからみ  
あいから説明できる。

なお、「～つづける」はほぼ「動詞連用形＋つづける」となるが、「名詞でありつづける」等の  
形をとるものも一部ある。本稿ではシツツケルをそれらの代表形とする。

## 2. 前項のアスペクト的な性格

シツツケルは「(する・名詞である)こと(をつづける・がつづく)」という意味を表し、補文的  
な構造を持つ複合動詞である。

シツツケルは前項の動詞と後項の「つづける」から構成されるため、以下では、まず前項(動詞  
句または名詞句)のアスペクト的な性格と後項の意味に分けて考察することにしたい。前項のアス  
ペクト的な性格として、持続性・点性(2-1.)、非限界・限界(2-2.)、動態・静態(2-3.)を 2. で取り  
上げ、後項の意味は 3. で取り上げる。更に 4. でシツツケルの使用の分析を試みる。

## 2-1. 持続性・点性

まず、シツツケルの前項のもつ持続性にはどんなものがあるか確認しておく。持続性は動詞句（名詞句）の持ちうるアスペクト的性格の一つである。事象との関連から一般的に言えば、広い意味での持続性には、動作過程、変化過程、変化後の結果、存在、属性が含まれる。シツツケルの前項の持つ持続性には動作過程があることが広く認められている。従来、瞬間動詞や状態動詞には「～つづける」がつかないとされているため、変化過程、変化後の結果、存在といった類の持続性は認められていないように思われる。しかし、調査資料には「瞬間動詞 / 状態動詞 + つづける」の用例が出ている。以下、従来の説を検討し、2-1-1. では前項が主体変化動詞（瞬間動詞）である場合、2-1-2. では前項が存在動詞やその他の静的な述語である場合を、2-1-3. では点性について考察する。

### 2-1-1. 前項が主体変化動詞（瞬間動詞）である場合

#### a. 先行研究

金田一（1955）は、シツツケルには事象の「継続」を表す「継続態」と、事象が繰り返し行われることを表す「反復継続態」の二つの用法があるとし、瞬間動詞には「反復継続態」はあるが、「継続態」はないとしている。この説はそのまま寺村（1984）等へ引き継がれ、広く一般的に受け入れられている。「瞬間動詞には継続態がない」（金田一 1955: 55）というのは、点的事象の場合には「継続」がなくて当然であるが、これでは瞬間動詞がアスペクト的性格としてもちうる「変化過程」や「変化後の結果」の「継続」まで否定することになる。例えば、寺村（1984）では「なる」のような瞬間動詞に「なりはじめる」は言えるが、「なりつづける」のような言い方はないとし、変化過程があってもシツツケルが使えないとしている<sup>1</sup>。

（2） 寒くなりはじめた

（2'）\*寒くなりつづけた（寺村 1984: 177）

ところが、調査資料には次のような「なりつづける」の用例がある。

（3） アシニリロムゾの視界は無闇に明るく広がった。男の子の後姿は、随分小さくなっていた。しかしまだ細かい動きが見え、小さくなり続けていた。（或る聖書）

（4） 長崎県雲仙・普賢岳（1,359メートル）の動きが気にかかる。地獄跡火口で刻々大きくなり続けてきた溶岩のかたまり。不気味だ。（朝日新聞 1991 / 5 / 24）

<sup>1</sup> 「なる」は「... 汽車の速度は次第にゆるくなった」（塩狩峠）のように、過程を表す副詞を伴うことができるため、瞬間に終わってしまう変化を表す動詞とは言えない。しかし、金田一（1950: 8）の規定（第三種の動詞に「『—ている』をつけるとその動作・作用が終ってその結果が残存していることを表わす。此等を『瞬間動詞』と呼ぼう」）に従うと、「なる」は瞬間動詞として捉えられることになる（寺村 1985: 175 を参照）。このような食い違いが生じる理由としては、「瞬間」という用語の捉え方に問題があることが考えられている。その問題点は奥田（1977: 97-98）等によって指摘されている。

(3) では遠ざかっていく男の子の後姿が小さくなる, (4) では溶岩の塊が大きくなる, という変化過程が捉えられている。(3) (4) は先行文脈において継続する変化が言及, あるいは示唆されている。このような文脈を想定すれば, 「寒くなりつつける」の使用容認も向上するのではないかと考えられる<sup>2</sup>。

森山 (1986) ではさらに前進し, 過程または維持といったアスペクト的な性格を持つ動詞ではシツツケルと言えるが, そうではない動詞では言えないと指摘している(例 (1) を参照)。しかし, 通常過程と維持以外を捉えると考えられる動詞にもシツツケルの用例が見られる<sup>3</sup>。

- (5) しかし, それは, まにら丸だから後日進水させることができたのだが, 第二号艦のような巨体では, 一度滑走に失敗したら, 再びそれを進水させることは不可能である。そのまま腰を下して, 船台の上に永久に固定しつづけるだろう。(戦艦武蔵)
- (6) 慣性の法則というやつだ。止まっているボールはいつまでも止まり続けている。だが, いったんそのボールに力が加えられると, 今度は動きだし, そして止まらなくなる。(ガラスの麒麟)
- (7) 一度損なわれたものは, それがまったく消滅してしまうとしてもやはり永遠に損なわれつづけるんだ。(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)

「止まる」のような変化の結果の場合, シツツケルは通常用いることはできないが, 「永遠に, 永久に」のような副詞を伴って, 変化後の結果の永続性が強調的に捉えられることがある<sup>4</sup>。

こうして, 調査資料に限ってみれば, 「瞬間動詞には継続態がない」という説は成立しないということになる。しかし, 変化過程と変化後の結果では, 瞬間動詞にシツツケルと言えるのであれば, 一般的に言えるのか, またはあまり言わないのかといった問題が残る。結論を先取りして言う, 「瞬間動詞(主体変化動詞)+つつける」は言いにくいものであると思われる。このことに関しては b. の資料の調査を見られたい。なお, 変化過程と変化後の結果の場合, 瞬間動詞にシツツケルが言いやすいか否かは, 議論のポイントが変化過程と変化後の結果にシツツケルが言いやすいか否かというところにあるため, これを変化過程と変化後の結果をもちうる主体変化動詞にシツツケルが言いやすいか否かという議論に言い換えてもよいことになる。

<sup>2</sup> 例えば, 「ロシアの冬は想像以上に寒かった。零下 20 度でも凍えるように寒い思ったが, その後, 一週間の間さらに寒くなり続けた。」(この点に関しては, 査読者の指摘を受けた。例文も査読者のものである。)

<sup>3</sup> (7) を非文と判断する母語話者がおり, (6) は特殊の文脈である。実例と母語話者の判断と両者を考え合わせれば, このような用例はまったく言えないわけではないが, 言いやすさが低いものとして位置付けられないかと考えられる。

<sup>4</sup> (6) の「止まり続ける」は森山 (1986) の言う「維持」タイプとして捉えることができる。ただ, 森山 (1986) は「\*とまりつつける」が言えないとしている。通常その通りだが, (6) のような文脈では, 「止まり続ける」の使用容認の程度が向上する。また, 例えば, 会期が決まっている国際会議などの場で, 会期が切れてしまうのに, まだ議案に片が付かない。何とか成立させ, 破算になってしまうのを避けるため, 「時計を止める」ということが意図的になされることがある。こうした語用論的に意志性が関与するような文脈を想定すれば, 「もう時計が 30 分止まり続けている」(この例は田島毓堂先生に教えていただいた)と使用容認の程度も向上すると考えられる。

## b. データ調査

小説や新聞から収集したシツヅケルの用例を、次の手順を踏んで調査した。調査結果とともに以下に示す<sup>5</sup>。

手順①: シツヅケル(異なり語数 627, 延べ語数 3414)の前項を抽出し、その中から使役形「(さ)せる」、受身形「(ら)れる」などの形と「～であり続ける」と他動詞はシツヅケルの使い方を考察する対象とはなるが、ふつうの(自他)動詞とは異なるため、調査の便宜上除外する。残ったものを自動詞と他動詞に分ける。

結果①: 異なりと延べを問わず、他動詞が自動詞の約 1.5 倍になり、量的に多いことが分かる(表 1 参照)。

前項が自動詞の場合の少なさに注目し、それについてさらに調査を進める。

手順②: 前項の自動詞をそれぞれ主体動作動詞と主体変化動詞に分ける<sup>6</sup>。(なお、調査の便宜上、主体動作動詞と主体変化動詞については、石井(1983: 84)に従って、「一つの動詞のとりアスペクト的な意味が一つとは限らない。むしろ、文脈の中で様々にかかわることが多い。しかし、ここでは、『変化』を表し得るもの、即ち、『——ている』という形式で『変化の結果の継続』を表し得るものは」後者と、「いかなる文脈の中でも『——ている』で『動作の継続』を表すことが『基本的であると考えられるもの』は前者として分類する。このように、「登る、進む」など、変化も動作も表し得るいわゆる二側面動詞(工藤 1995: 79 参照)をも含めるといことで、主体変化動詞の範囲を少し緩めることとなった<sup>7</sup>。)

結果②: 異なりでは「主体動作動詞(自)+つづける」が「主体変化動詞(自)+つづける」の約 1.8 倍、延べでは「主体動作動詞(自)+つづける」が「主体変化動詞(自)+つづける」の

<sup>5</sup> データは (a) 『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』の日本文学作品 (48 部)、(b) 『芥川賞全集』(1～12, 15)、(c) 『しろばんば』『夏草冬濤』井上靖、『寺内貫太郎一家』向田邦子、『真実一路』山本有三、『人間の壁』石川達三、『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』村上春樹、『恍惚の人』有吉佐和子、『二十四の瞳』壺井栄、『なんとなく、クリスタル』田中康夫、(以上は新潮文庫); 『蒲田行進曲』つかこうへい(角川文庫); 『窓ぎわのトットちゃん』黒柳徹子(講談社); 『神の汚れた手』曾野綾子(文春文庫); 『日本アパッチ族』小松左京(光文社文庫); 『雨の日文庫 4』(むぎ書房); 『金田一耕助の秘密』プレス・コーポレーション、『七曲署の秘密』西村淳 / プレス・コーポレーション、(以上は日本電子出版)、(d) 『CD-ROM 版新潮文庫大正の文豪』『CD-ROM 版新潮文庫明治の文豪』その他の小説、以上計 166 部の作品と、(e) 朝日新聞「窓」(1992～1993)、「天声人語」(1985～1988) から集めてきた。

<sup>6</sup> その他、自動詞で主体動作動詞と主体変化動詞に属さない動詞には「あり続ける」(6 例)や、「い続ける」(25 例)や、「存在し続ける」(14 例)などがある。ちなみに、前項が動詞ではなく、「ある、いる」などと同じく静的述語である「～であり続ける」が 42 例ある。

<sup>7</sup> 「進む、登る」などは、シテイル形式で「動作の継続」と「結果の継続」のいずれかを実現し、主体の動作とともに変化をとらえている。例えば、「... 船は狭い運河を徐々に進んでいた」(巴里に死す)が前者の意味を、「彼女は私が予測したよりはずっと上のほうに進んでいた」(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)が後者の意味を実現する。こういった二側面動詞は分析においては「死ぬ」のような主体変化動詞と区別して扱ったほうがよいが、統計調査においてはいちいちの用例に対して主体動作動詞、主体変化動詞、二側面動詞等と細かく区別することが比較的難しいので、ここではシツヅケルの前項の自動詞を大まかに主体動作動詞と主体変化動詞とその他に三分し、二側面動詞を暫時主体変化動詞の中に入れることにした。

約 3.3 倍となっており、その差が大きいことが分かる。(表 1 参照)

このように、シツツケルは前項が主体変化動詞の場合と主体動作動詞の場合とで際立った差が見られる。そして、延べと異なりの比から、前項が主体変化動詞である場合(4. 04: 1)より主体動作動詞の場合(7. 28: 1)の方がはるかに値が高く、平均的な使用頻度が高いことが分かる。ここから「主体動作動詞+つづける」に使用が集中しており、「主体変化動詞+つづける」はあまり使用されていないと推定できる。言い換えれば、「主体変化動詞+つづける」は「主体動作動詞+つづける」に比べ、実際にはあまり用いられておらず、言いにくいということが言える。

もっとも、「主体変化動詞+つづける」があまり使われず言いにくいとはいっても、決してどのメンバーも一様というわけではない。その内訳を見ると、「主体動作動詞+つづける」の平均値(7. 28)を上回るもので、実例が 8 例以上出るものには、「眠り続ける(61)、座り続ける(35)、立ち続ける(23)、増え続ける(15)、進み続ける(14)、あがり続ける(11)、黙り続ける(11)、乗り続ける(10)、登り続ける(8)」(括弧内の数字は用例数)がある。これら 9 単語の用例数(188)は「主体変化動詞+つづける」の全用例数(291)の 65% を占めている。残りの単語は、5 例のものが 3 つ、4 例のものが 4 つ、3 例のものが 3 つのほか、2 例のもの(10)と 1 例のもの(43)に集中している。つまり、主体変化動詞は一般的にはシツツケルが言いにくいですが、そんな中でも言いやすいものがあるということになる。

シツツケルが言いやすいか否かは、前項のアスペクト的性格と大きく関係する。上の 9 単語のうち、「眠り続ける、座り続ける、立ち続ける、黙り続ける、乗り続ける」の 5 単語は、基本的に変化後の結果の続きを表すが、その言いやすさは動態的という前項動詞のアスペクト的性格に起因すると考えられる。これについては 2-3. で考察したい。そして、残りの 4 単語「増え続ける、進み続ける、あがり続ける、登り続ける」は変化過程の続きを表すが、その言いやすさは前項動詞の非限界性というアスペクト的性格に起因すると考えられる。これについては 2-2. で考察したい。

なお、結果②で見た主体変化動詞の場合と主体動作動詞の場合との大差は、前項動詞の性質と後項のツツケルの絡み合いから来た結果であり、主体変化動詞の量的な制限に由来するとは言えない。この主張をサポートする傍証を求めるために、同じ局面動詞のシハジメルを、同じような手順で調査した。ただし、調査対象はシツツケルの場合とは異なる<sup>8</sup>。調査結果を表 1 に示す。異なりでは「主体変化動詞(自)+はじめる」が「主体動作動詞(自)+はじめる」よりやや多く、延べでは逆に「主体動作動詞(自)+はじめる」が「主体変化動詞(自)+はじめる」より少し多いため、両者に差は認められるものの、シツツケルの場合に見られるような際立った差ではないことが分かる。ちなみにシハジメルの前項の自他にも、シツツケルの場合に見られるような差はない。また、異なり語数では「主体変化動詞+はじめる」は 212 あり、「主体動作動詞+はじめる」を

<sup>8</sup> シハジメルの調査対象は注 1 のデータの (a)~(c) となる。

上回っていることから、主体変化動詞に量的な制限があるというわけではないことが分かる。繰り返しになるが、ここで主張したいのは、シツツケルでは前項が主体変化動詞の場合と主体動作動詞の場合とで、差が他と比べてもかなり異常であり、そしてその差が主体変化動詞に数の限定があることから来たものではないということである。

表 1

		異なり	延べ		
自動詞＋続ける	主体動作動詞(自)＋続ける	132 (64.71%)	961 (76.77%)	他動詞＋続ける	320 1850
	主体変化動詞(自)＋続ける	72 (35.29%)	291 (23.24%)		
	計	204	1252		
自動詞＋始める	主体動作動詞(自)＋始める	168 (44.21%)	693 (53.06%)	他動詞＋始める	396 1330
	主体変化動詞(自)＋始める	212 (55.79%)	613 (46.94%)		
	計	380	1306		

#### 2-1-2. 前項が静的な述語である場合

「～つづける」は、状態動詞(金田一 1950 の用語、例えば、存在動詞、可能動詞、関係動詞など)に付かないという寺村(1984)の指摘もあるが、可能動詞や関係動詞などについてはその通りであるものの、次のように前項が存在動詞の場合の用例もある。

- (8) 大晦日から正月の二日まで、久木は珍しく家に居続けた。(失楽園)
- (9) これは何よりも先ず、有と無とをはっきりと区別する考え方である。有るものはどんなに形を変えても、どこまでも有り続ける。(エビクロス)
- (10) 誰だって、未来永劫存在しつづける物質の行方など相談されたら、唸るほか仕方がなくなる。(ノンちゃんの冒険)

(8)では「久木」が家に居るという存在主体の意志性が捉えられるのに対して、(9)と(10)では物の存在の永続性が強調されている。

その他、従来、あまり注目されていないが、「名詞でありつづける」という言い方が一部存在し、状態・属性を示す表現となっている。まれに「ナ形容詞でありつづける」というような用例もある。形式においても意味内容においても条件が揃っていれば、シツツケルが言えないわけではないということの裏付けとなるかもしれない<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> 調査資料には「イ形容詞＋つづける」の用例が出ていないが、母語話者から「(イ形容詞)くありつづける」の語形があることを教えていただいた。Web 上からも“...私も微力ではございますが我が島立がいつまでも素晴らしくあり続けるため明るく豊かな郷土づくりに向け頑張てまいりますので...”  
[http://www.city.matsumoto.nagano.jp/www\\_cbox/html/chukou/kanpou/20020530/simadati.pdf](http://www.city.matsumoto.nagano.jp/www_cbox/html/chukou/kanpou/20020530/simadati.pdf)  
 (2003年7月24日参照)と“...常に自戒の念を携帯しつつ、自分自身に対してきびしくあり続けなければ...”  
<http://www.geocities.co.jp/PowderRoom-Lavender/5152/magic/tanitani/female.html>  
 (2003年7月24日参照)と二例ほど採取できた。

- (11) 以後チョムスキーは現在に至るまで米国マサチューセッツ工科大学(MIT)を拠点として、理論言語学の世界ではよい意味でも常に最前線の人であり続けている。(意味論2——認知意味論——)
- (12) 哲学君と過ごしたその時間を、如何に自分が愛していたか、その時間が自分にとって、如何に大切であったか、大切であるか、そしてこれから先も大切であり続けるか。(ノンちゃんの冒険)

総じて言えば、前項が静的な述語である場合は実例数が少なく(注6を参照)、シツツケルの使用の周辺となると言える。

2-1-1. と 2-1-2. のまとめとなるが、シツツケルの持つ持続性は、反復以外では、変化過程から動作過程へ、さらに存在、変化後の結果、属性などへと幅広いものにまたがり、使用の中心は動作過程にあることになる。

### 2-1-3. 点 性

「叩く、投げる、ける、飲み込む」など動作を表す動詞がシツツケルの前項になる場合、動作が連続的に繰り返されるという多回の意味になりやすく、また、「死ぬ、生まれる、消える」など変化を表す動詞がシツツケルで変化点を捉える場合、変化が不連続的に繰り返されるという反復的な意味になりやすい。これは、通常では一回の動作や変化点には持続性が殆どないからである。

このような点性をとらえる動詞は、多回や反復の場合を除いてはシツツケルが言えない。しかし、多回の場合でも、例えば「(手で地面を)叩く」のような場合、二三次叩くだけでも一定の長さの時間動作が続くことになり、持続性がないわけではないが、「叩き続ける」とは言いにくい。そして、例えば「食べる」のような通常持続性を持つ動詞でも、二三口食べるような場合、「食べ続ける」とは言いにくい。このように、すぐ終わってしまいそうな短い持続性ほどシツツケルが言いにくいのである。

## 2-2. 限界・非限界

### 2-2-1. 限界による制約

b. のデータ調査で分かったことだが、主体変化動詞は平均的にシツツケルが言いにくい、そんな中でも「増える、進む、あがる、のぼる」といった動詞は特殊で、シツツケルが言いやすい。これはこの種の動詞の持ち得る非限界性と関連すると考えられる。

日本語の動詞は限界性によって限界動詞と非限界動詞に分類されている。限界動詞は(終了)限界を必然的に持つ動詞で、限界に到達しなければ運動が成立したとは言えない。それに対して、非限界動詞は必然的な(終了)限界がない動詞で、運動が成立しさえすれば、どこで中止されても動作が成立したと言える(工藤 1995: 72-73 参照)。「歩く、走る、泳ぐ」などの非限界動詞は「歩き続ける、走り続ける、泳ぎ続ける」のように、それぞれ一つの動作過程を続けるという意味を表すことができ、これらはシツツケルが言いやすい。しかし、「割る、入れる」などの限界動詞は、



「皿を 30 分割り続ける」「植木鉢を玄関に 30 分入れ続ける」のように、結果継続の場合を考慮に入れなければ、シツツケルが一時的な意味にはならず、反復の意味になってしまう(北原 1999: 173-174 参照)。

一般的に言えば、時間の幅を持つ変化には開始限界、持続部、終了限界があると考えられる。「増える、進む、あがる、登る」といった動詞は、開始限界、終了限界、持続部のいずれも特に際立つものではない。ヲ格または二格といった構文的な要素と組み合わせさせて、そのどちらかが実現するものである。従って、純粋な主体変化動詞とは言えず、変化の側面も動作の側面も捉えうるため二側面動詞とされる(工藤 1995: 79)。限界性からみても、動詞レベルではその限界性が決定できず、動詞句レベルで「(15 分ほどで)崖の上に登る」「(15 分ほどの間)崖を登る」のように決定されるということになる。こういった動詞は非限界性を持ち得るということで、シツツケルが言いやすいのである。

これに対し、「帰る、もどる、来る、ひきかえす」などの位置変化動詞や「明ける、白む、枯れる、暮れる、色づく」などの状態変化動詞は、持続部よりも(終了)限界が際立つ。そのため、持続部を取り出すには「しつつある」や「してくる」などといった特別な形式を取らなければならない。いわゆる限界動詞である。こういった「帰る、もどる、暮れる、枯れる」などの動詞は、シハジメルなどの形式でよく使用される。平均的な使用頻度が少ないとはいえないが、大量の調査資料であってもシツツケルの実例はほとんど出て来ない。もっとも、限界動詞はシツツケルが言いにくい、全く言えないわけではない。例えば、「(小さく)なる」は限界動詞であるが、例(3)(4)のように語用論的に持続部を際立たせることもある。

主体動作客体変化動詞も限界動詞とされるが、同じく言いにくい現象が観察できる。例えば、「窓を開け続ける」は一つの窓をあけるという単一事象の解釈よりも複数の窓を開けると複数の事象のように解釈されやすい。そして、例えば「門を開け続ける」は単一事象という解釈の場合、普通の門よりも大きくて重たそうな門を想像されやすい。なお、主体動作客体変化動詞でも「作る、(セーターを)編む、(穴を)掘る」といった創造動詞は、限界まで導いていく持続部が通常長いためか、シツツケルが言いやすい。これに対し「買う、(火を)つける」は反復的な解釈を除いて、限界まで導いていく持続部が通常それほど長くないため、シツツケルが言いにくい。これは、このタイプの動詞は通常持続部よりも終了限界が際立つからである。つまり、持続部を取出すには、特別な場合か、通常長い持続部をもつものを考慮に入れなければならないのである。

## 2-2-2. 非 限 界

2-1-2. で述べてあるが、状態動詞や名詞述語のような静的な述語は、実例の量が少なく、シツツケルが言いにくいと言える。こういった静的な述語は広い意味での非限界的な事象に属する。この種の非限界的な事象は「書く、読む」のような非限界動詞と区別されるべきである。前者は必

然的に非限界であり、シツツケルが言いにくい、後者は語彙的な意味に必然的な限界を持つわけではなく、また必然的に非限界というわけでもないため、シツツケルの使用の中心メンバーとなる。この二種の非限界的な事象についてはまた 4. で詳述する。

なお、「止まる、固定する」などは主体変化動詞であり、変化点＝限界点を内的に持つため、「時計が(三時間で)止まる」のように基本的に限界動詞とされるが、変化後の結果を捉える場合もあり、「時計が(三時間)とまる」のように非限界的な事象になることもある。

### 2-3. 動態・静態

動態とは「事態が、あり様を変動させること」であり、静態とはそれを「変動させず同質的で一様なあり様を呈すること」である(仁田 2001: 17、ただし仁田 2001 の用語では「動的事態」と「静的事態」となっている)。仁田 (2001) では、事象(仁田 2001 の用語では命題)のタイプは、① 開始と展開と終了を持ちうる (+) か否 (-) か、② 時間的限定性を持つ (+) か否 (-) かという基準で動き(動作・変化)・状態・属性の三類四種に分けられている。動きは① も② も+であり、状態は① が-、② が+であり、属性は① も② も-である。動態・静態との関連で言えば、動きは動態であるのに対し、状態と属性は静態である<sup>10</sup>。

寺村 (1984: 177) で指摘されていることだが、「～ツツケルは、ある事態が継続するという動的な事象を表わすものである」(下線、筆者)。シツツケルの使用は基本的に寺村 (1984) の指摘する通りである。そして、b. の調査から、主体変化動詞は基本的にシツツケルが言いにくい、その中でも「眠る、座る、立つ、黙る、乗る」といった一部の動詞はシツツケルが言いやすいことが分かっている。こういった動詞は、高橋 (1985: 49) では持続を表す場合は動作動詞化とされる。また、仁田 (2001: 19) では「子供ガ椅子ニ座ツテイル」が動きとされる。動態の典型例ではないが、どちらかと言えば静態ではなく動態的と考えられているのである。

しかし、静態にシツツケルが言えないわけではない。「?? ものが (10 分してから) もあり続ける」のように通常は言いにくい、例 (9) (10) (11) のように永続性や長期性が強調的に捉えられる場合には比較的言いやすくなる。「死ぬ、(ものが)とまる」が変化後の結果を捉える場合も同じで、通常はシツツケルが言えないが、例 (5) (6) (7) のように持続時間の恒常性(長期性)が取りたてられるような場合には、比較的言いやすくなる。つまり静態におけるシツツケルの使用条件は動態のそれに比べ厳しいのである。

動態と静態は一つの連続体をなすだろう。動作や変化は動態の典型であり、ものの属性は静態

<sup>10</sup> 本稿では事象のタイプの区分は基本的に仁田 (2000) に従う。ただし、具体的な分析では、例えば、「歩いている」は「歩く」という動きの一局面として捉える。「窓が開いている」のような変化後の結果的状态は、仁田 (2001) では暫定的に動きの中に入れている。変化後の結果的状态はいわゆる状態パーフェクトの領域に属するもので、開始や終了などのような動きの局面とは異なるので、本稿では状態または場合によっては属性に仲間入りさせることにする。

の典型である。静態でも意志性のあるものは動態に近づく。そのため、静態であっても動態に近いような精神的にコントロールされる(と感じられる)ものほどシツツケルが比較的に言いやすくなる。(13)(14)の「預け続ける」、「置き続ける」がその例である。(13)と(14)は、「預ける」動作、「置く」動作を続けるのではなく、その結果状態を主体的に維持するのである。そして、「ドアを開ける」のような表現は結果後の状態では、通常はシツツケルが言いにくい、より動態的な「手で(自動開閉式の)ドアを開け続ける」のような場合や精神的にコントロールされる(と感じられる)場合には言いやすくなる。

- (13) 預け入れ時に預け入れ期間を設定する必要はありません。六ヵ月以上一〇年までのあいだ、好きなだけ預け続けることが可能な、自由満期です。(郵便局でお金をふやす秘密集)
- (14) 「そうございましょう。水に浸く程度の平城であるこの川手の城府のごときは、攻め掛けようとすれば一夜で陥することができます。この弱城に強いてお屋形様を置きつづけたいというのは、他日のたくらみのある証拠」(国盗り物語)

静態の中でも存在動詞「いる」は、「ある」より用例がはるかに多く(注6を参照)、その意志性と関連してシツツケルが言いやすい。意志性と動態との関連は金水(2000)にも観察されている。このシツツケルの使用における意志性の関与は、金水(2000: 26)の述べる「意志性の有無は出来事の時間的な構造の認識に大きく影響を及ぼす」に起因すると考えられる。

### 3. 後項の意味: 続き性

シツツケルが動作過程を捉える場合に集中し、静的な事象や限界動詞には言いにくいというように、シツツケルが前項のアスペクト的性格と関連することは2.で考察してきた。更に、シツツケルのこうした使用のバイアスには、後項の意味が大きく関与すると思われる。

シツツケルは継続態と名付けられるが、「している」の表す継続態と用語が同じであるため混乱を避けるために、シツツケルの後項の表す意味を、ここでは「続き性」とする。

- (15) 朝から晩まで読みつづける
- (16) 前に止めたところから読みつづける

シツツケルは、例(15)では「途切れずにずっと...する」、例(16)では「先行部分と同じように、引き続き...する」という解釈となる。この二つの解釈をまとめるものが続き性である。「することを終わらせないようにする(することが終わらない)」と言い換えておく。それぞれの解釈はこの一般的な意味と文脈との相互作用の結果によると考えられる。持続期間の全体を捉えれば前者の解釈となり、持続期間の後の部分を捉えれば後者の解釈となる。後者の場合は「相変わらず、依然として、やはり、なお、今後も」などの副詞的語句を伴うことが多い。

続き性は、終わり(限界)に対する否定がポイントとなると思われる。複合動詞としてのシツツ

ケルは、語彙的な意味の中に限界が含まれず、広い意味での非限界動詞だが、終わりに対する否定という性格は、それがその他の非限界動詞と違うことを決定している。

(17) 『我が輩は猫である』を(3日 / 3日)読んだ。

(17') 『我が輩は猫である』を(\*3日 / 3日)読みつけた。

非限界動詞の「読む」は、一定の構文条件(限界的な目的語を持つ)で、(17)のように「3日で」のような時間副詞句と共起でき、限界動詞として働くことがあるが(三原 2002 参照)、「読みつける」は同じような構文条件であっても、(17')のように「3日で」のような時間副詞句と共起できず、限界動詞に変容することはない。シツツケルの意味構造は後項の続き性が前項のもつ事象全体を包み込み、その事象が終了(限界)に到達することがない(をしない)という性格を捉えるからである。そのため、すでに金水(2000: 74)で指摘されている通り、限界動詞も非限界動詞と同じくシツツケルの前項となるが、限界動詞はシツツケルの前項となると、限界を保つことができないのである。

従って、終わりに対する否定という性格を持つシツツケルは、非限界動詞と相性がよく、使用もそこに集中する。それに対しシツツケルと限界動詞の相性は悪く、用いられにくいのである。

#### 4. シツツケルの使用の分析

シツツケルの内部構造の基本はプロトタイプ理論の単純なケースとして扱うことができる。即ち、シツツケルの前項に入るものには、中心的なメンバーと周辺的なメンバーがあり、周辺的なメンバーが中心的なメンバーのもちうる素性の一部しか持たないという形で捉えられる。

シツツケルの前項の中心的なメンバーは、持続性・動態・非限界といった素性を持つが、周辺的なメンバーは持続性・動態・限界あるいは持続性(永続性、長期性)・静態・非限界的のいずれかを持つ。また、事象のタイプからみれば、中心的なメンバーは動作に集中するが、周辺的なメンバーには変化も状態・属性も現われる。

中心的なメンバー: [持続性] [動態] [非限界]といった素性を持つ事象

探す, 吸う, 飲む, 振る, 話す, 言う, しゃべる, 歌う, 叫ぶ, 呼ぶ, 聞く, 見る, 眺める, 読む, 書く, 歩く, 走る, 生きる...; 泣く, 鳴く, 動く, 降る...; 考える, 思う, 感じる...; 抱く, 持つ, 立つ, 坐る, 跪く, 乗る...

周辺的なメンバー: [持続性] [動態] [限界]といった素性を持つ事象

(窓を)開ける, (縄を)おろす, 割る, ...; なる, 変わる, 沈む...

[持続性] [静態] [非限界]といった素性を持つ事象

ある, 存在する...; 損なわれる, 死ぬ, 止まる...<sup>11</sup>; 父である, 子供である...

<sup>11</sup> 「損なわれる, 死ぬ, 止まる」はアスペクト的にみれば変化と変化後の結果からなる。ここでは、変化後の結果をとらえる場合をいう。

これを図1のように示すことができる．点性を持つ事象は，反復の場合を除いてはシツヅケルが言えない．シツヅケルの中心は，持続性・動態・非限界を持つ事象にあるが，より限界的で動態的な事象になるほど，また逆に非限界でより静態的な事象になるほど，シツヅケルが周辺的となる．

	持	続	性	点性
静	態	動		態
	非	限	界	界
	しつづける			

(  「しつづける」の中心的領域       「しつづける」が使えない領域)

図1

シツヅケルの言いやすさも，基本的にこうした前項のもつ素性と関連して度合いをなすものと考えられる．「探し続ける，吸い続ける，飲み続ける」など，前項が[持続性][動態][非限界]である事象はシツヅケルが言いやすく，使用上の典型例となる．それに対して，前項が[持続性][動態][限界]である事象や[持続性][静態][非限界]である事象は，典型例より少しずつ使用容認の程度が下がる．

「織り続ける，作り続ける，編み続ける，掘り続ける，温め続ける」など，[持続性][動態][限界]である事象で，限界に到達する過程＝持続部が通常長いものは，典型例ほどではないが，シツヅケルが言いやすい．(18)をその例として挙げる．また，(19)のように，語用論的に持続過程がかなり際立つ場合も使用容認の程度が上がる．

- (18) 夫人はしばらく編みつづけてから手をとめ，編目をかぞえながら，ふとつづやいた．(裸の王様)
- (19) 君は小賢しい邪魔者から毛糸の襟巻きで包んだ顔をそむけながら，配縄を丹念に下ろし続ける．(生れ出づる悩み)

これに対して，[持続性][動態][限界]である事象で，限界に到達する過程＝持続部が，通常短いものは，シツヅケルが比較的言いにくい．「(大きく重たそうな)門を開け続ける」は動作の持続過程ではやや不自然な言い方となるが，例(20)(21)のようになると，かなり不自然な言い方となる．さらに点的事象となると，「\*死に続ける」のようにシツヅケルを用いることができなくなる．

- (20) ??(電車の中で)戸棚から(一個の)(軽い)荷物を下ろし続ける．
- (21) ??(一枚の)皿を割り続ける．

「いつづける」など，[持続性][静態][非限界]である事象で，意志性をもつものには，典型例

ほどではないが、シツツケルが言いやすい。例えば、(8)のような例である。また、(22)～(25)のように、恒常性(長期性)が取り立てられる場合もシツツケルが言いやすくなる。

- (22) お金だけでなく、離婚後も「父であり続ける」ために、「職場の条件作りの大切さ」を説く声もあった。(朝日新聞 1996/6/15)
- (23) 天皇がエンペラーとなって伝統逸脱が生じたが、敗戦のあとも、天皇は形式だけのエンペラーであり続けている。(日本人の法感覚)
- (24) その意味で、氏は生涯を通じて「前衛作家」でありつづけた。(堀辰雄 人と作品)
- (25) もちろん、遭難事故と事件とは関係ないと思います。しかし、琵琶湖は五十年間もずっと琵琶湖でありつづけたという意味で、ちゃんと繋がっています。(琵琶湖周航殺人歌)

これに対し、[持続性][静態][非限界]である事象で、「窓を開ける」や「戸棚に物をしまう」などは、結果の続きの場合、意志性が含まれるか否かの判断が難しく、「窓を開け続ける」や「戸棚に物をしまい続ける」はやや不自然な言い方となる。また、例(26)(27)のように、意志性の全く感じられないものや恒常性(長期性)が取り立てられないものは、シツツケルがかなり言いにくい、または言えない。

- (26) ??物が(10分してからも)あり続ける。
- (27) ??田中さんは10分してからも作家でありつづけた。

シツツケルのこのような使われ方は、前項と後項の特徴の合致の具合で説明できる部分があるように思われる。

まず、点性はシツツケルの後項の表す[終了限界に対する否定]と素性が合わないため、点性を持つ事象ではシツツケルが言えない。

また、(終了)限界は[終了限界に対する否定]と素性が背反し(=逆方向へ向かい)、常にシツツケルの実現を制約する要素として働く。そのため限界的な事象の場合は、非限界的な事象の場合に比べシツツケルが言いにくい。例えば、「窓を開ける」といった限界的な事象は、終了限界に容易に達成するため通常(反復相以外では)シツツケルが言いにくい。これに対して「歩く」のような非限界的な事象では、シツツケルが言いやすい。しかし、限界的な事象でも持続性を持つ場合には、その持続性がシツツケルの後項の意味と合う。そのため、例(18)のように「セーターを編み続ける」や「穴を掘り続ける」などが言いやすくなるのである。これは、それらの持続過程が通常かなり際立つからである。このように、持続性を持つ限界的な事象は、一方ではシツツケルの後項と合致し、他方ではシツツケルの後項と背反し、シツツケルの実現を制約する要素として働く。「窓を開ける」のように通常限界的性がより際立つ場合、シツツケルが言いにくい。反対に、「セーターを編む」のように通常持続性がかなり際立つ場合にはシツツケルが言いやすくなる。そのため、例(20)「(電車の中で)戸棚から(一個の)(軽い)荷物をおろす」のような場合には、持続過程がそれほど際立たないことから、シツツケルが言いにくく、例(19)のように「(少しずつ)縄をおろす」のような場合には持続過程がかなり際立つためシツツケルが言いやすいのである。

る。両者の絡みあい例(19)のように語用論的なものが関連するほか、意味論的な関連もある。例えば、「帰る」といった限界的な事象は、持続過程が時間的に短いというわけではないが、意味論的に持続過程よりも終了限界のほうがより際立つためシツツケルが言いにくいのだと考えられる。このように、持続性・限界を持つ事象は、限界と[終了限界に対する否定]が背反し、前項と後項とが意味的に合うため調整が必要となり、使用が限られ、シツツケルの使用領域で、周辺となるのである。

静態は「同質的で一様なありさま」(仁田 2001)をなし、必然的に非限界となる。非限界はシツツケルの後項の表す[終了限界に対する否定]と素性が合う。しかし、非限界には、静態のように必然的に非限界となるものと、「歩く」や「書く」のように必然的に終了限界があるわけではないが、終了限界が可能な非限界とがある。静態は持続過程の性格が[終了限界に対する否定]と素性に重複する部分があるため、よほどの場合でない限り、シツツケルでその持続過程を取りたてて言う必要性が低い。例えば、「田中さんは作家であった」という事象(属性)や「田中さんが字を書いた」という事象(動き)が真であり、そしてそれらが10分後も真であるとする。同じく持続過程を持つが、例(27)のように、前者ではシツツケルを通常用いないが、後者では「田中さんは(10分してから)字を書き続けた」と言いやすい。シツツケルが属性の持続過程に入るには、それがさらなる存続の可否に大きく関与する場合に限られる。例えば、(22)(23)では離婚や敗戦は主体がその後その属性を止めるか止めないかという重大な事態と大きく関わっている。また、シツツケルが属性の持続過程を取りたてる場合、一時的な事象として取りたてることはないが、例(24)のようにその恒常性(長期性)を取りたてることは可能である。属性には恒常性(長期性)という性格がもともと備わっており、この種の用法は強調的なものと考えてよいと思われる。例(25)では主語と述語は同語反復となり、シツツケルの強調性が濃厚に表れている。

限界は、シツツケルの後項と意味的に背反し、常にシツツケルの実現を制約する要素として働く。静態は、シツツケルの後項と性格上重複する部分があり、シツツケルで言う必要性の度合いを低くする要素として働く。これに対し、「歩く、書く」のような、必然的に終了限界があるわけではないが、終了限界が可能な非限界のものは、シツツケルの後項と意味的に合致し背反せず、かつ重複がなく、シツツケルで言う必要性の度合いが高いために、シツツケルの使用の中心となると考えられる。

## 5. おわりに

以上の内容をまとめると、次のようになる。

- (1) シツツケルの使用は基本的に持続性が関与する。その他、動態・静態、限界・非限界といったアスペクト的性格との関連も大きい。

- ① シツツケルの持つ持続性は、反復相以外では、従来専ら注目されてきた動作過程だけに止まらず、変化過程から、存在、変化後の結果、属性などへと幅広いものにまたがり、その使用の中心は動作過程にある。
  - ② シツツケルの使用に限界による制約がある。前項が限界動詞としての主体変化動詞や主体動作客体変化動詞の場合、シツツケルの言いにくさが観察される。
  - ③ 動態ではシツツケルが言いやすいが、静態ではシツツケルが言いにくく、使用に制限がみられる。
- (2) シツツケルの前項の中心的なメンバーは、持続性・動態・非限界といった素性を持つが、周辺的なメンバーは持続性・動態・限界あるいは持続性(永続性、長期性)・静態・非限界のいずれかを持つ。シツツケルの用法は持続性、動態、非限界といった素性と関連しており、言いやすいものから言いにくいものへと度合いをなす。このような使用は前項と後項の特徴の合致の具合で説明できる部分がある。

#### 付 記

本稿は筆者の修論(「アスペクトの日中対照研究——『しつづける』の分析を中心に——」 横浜国立大学大学院 1998 年度修士論文、未公開。)の一部と 2002 年 9 月に大連外国語学院(中国)の主催した第 3 回中日韓文化・教育研究国際フォーラムで発表した原稿「『しつづける』について」をベースに大幅に加筆修正したものである。修論の執筆にあたって鈴木重幸先生と金澤裕之先生を始めたくさんの方から資料の提供と懇切な指導をしていただきました。発表会などの場において田島毓堂先生と定延利一先生、また改訂にあたって査読者から、不備のところを指摘していただき有益なコメントを賜った。論文本体の日本語チェックは金澤裕之先生と華僑大学外国語学院の日本語教師の黒崎佐仁子先生にお願いした。改めて感謝の意を表したい。もちろん本稿の一切の誤りは筆者自身の責任に帰する。

#### 参 考 文 献

- 石井正彦(1983)「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」『日本語学』2-8, 明治書院 79-90.
- 奥田靖雄(1977)「アスペクトの研究をめぐって——金田一段階——」『ことばの研究・序説』所収 1985, むぎ書房 85-104.
- (1978)「アスペクトの研究をめぐって」『ことばの研究・序説』所収 1985, むぎ書房 105-143.
- 北原博雄(1999)「日本語における動詞句の限界性の決定要因——対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論——」, 黒田成幸・中村捷編『ことばの核と周縁 日本語と英語の間』, くろしお出版 163-200.
- 金水 敏(2000)「時の表現」, 金水敏等著『時・否定と取り立て』, 岩波書店 1-92.
- 金田一 春彦(1950)「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』所収 1976, むぎ書房 5-26.
- (1955)「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』所収 1976, むぎ書房 27-61.
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』, ひつじ書房.
- 桑原文代(1998)「変化の開始を表す『～はじめる』」『日本語教育』99, 1-11.
- 鈴木重幸(1983)「形態論的カテゴリーについて」『形態論・序説』1996 所収, むぎ書房 85-104.
- 高橋太郎(1985)『日本語動詞のアスペクトとテンス』, 秀英出版.
- (1989)「動詞(その八)」『教育国語』99, むぎ書房 43-57.



- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 II』, くろしお出版 .  
 仁田義雄(2001)「命題の意味的類型についての覚え書」『日本語文法』1-1, 日本語文法学会 5-23 .  
 三原健一(2002)「動詞類型とアスペクト限定」『日本語文法』2-1, 日本語文法学会 132-152 .  
 森山卓郎(1986)「日本語アスペクトの時定項分析」, 宮地裕編『論集日本語研究(一)現代編』, 明治書院 78-116 .

- Comrie, B. 1976. *Aspect*. (日本語訳: 山田小枝(訳) 1988 『アスペクト』, むぎ書房)  
 Lehmann, C. 1999. Aspectual Type (s). In K. Brown and J. Miller (eds.) *Concise Encyclopedia of Grammatical Categories*. Amsterdam. Elsevier. 43-49.  
 Dahl, ö. 1985. *Tense and Aspect Systems*. Basil Blackwell .  
 Freed, A. F. 1979. *The Semantics of English Aspectual Complementation*. Kluwer Academic Publishers.

### 例 文 出 典

- 【『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』村上春樹 / 『戦艦武蔵』吉村昭 / 『国取り物語』司馬遼太郎 / 「生れ出づる悩み」『小さき者へ・生れ出づる悩み』有島武郎 / 「裸の王様」『パニック・裸の王様』開高健 / 『塩狩峠』三浦綾子 / 「堀辰雄 人と作品」中村真一郎(『風立ちぬ・美しい村』より)(以上は『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』)】【『或る聖書』小川国夫 / 『ノンちゃんの冒険』柴田翔 / 『巴里に死す』芹沢光治良(以上は『CD-ROM 版新潮文庫の絶版100冊』)】【『ガラスの麒麟』加納朋子 / 『失樂園』渡辺淳一 / 『琵琶湖周航殺人歌』内田康夫 / 『日本人の法感覚』中川剛(以上, 講談社)】【『郵便局でお金をふやす秘密集』井上隆司, 経済界】【『意味論2——認知意味論——』杉本孝司, くろしお出版】【『エピクロス』湯川秀樹, 『日語学習与研究』1982. 3, 北京対外貿易学院】【朝日新聞 1991/5/24 / 朝日新聞 1996/6/15】